『法然上人行状絵図』に描かれた月輪殿の庭園

臨池伽藍の系譜　平安時代中期、貴族の邸宅内に仏堂が営まれる事例が増加するなか、藤原道長は無量壽院（のちに法成寺）を造営、さらにその子・頼通は平等院を造営する。無量壽院は九体阿弥陀堂の前面に池を配置する形態、平等院は両側に翼廊・楼を備えた阿弥陀堂の前面に池を配置する形態である一方、無量壽院から発展した法成寺は諸堂が池を取り囲む形態であった。いずれも、仏堂前面に池を配置するという観点での「臨池伽藍」であるが、阿弥陀浄土のイメージという点では前二者が「浄土庭園」の名にふさわしいものと私は考えている。これらを契機として、以後、平安時代後期には仏堂の前面に園池を配する臨池伽藍あるいは浄土庭園が貴族・皇族による仏寺のひとつの形式として定着する[1)]。

法然と九条兼実　鎌倉時代にも、平安末期に奥州平泉で営まれた毛越寺や無量光院などの臨池伽藍・浄土庭園の影響もあって、関東では臨池伽藍・浄土庭園の造営が続く。かたや、京都においては、平家政権が没落し関東に源氏政権が樹立される移行期という時代状況のなか、観想念仏に重きを置く平安中期からの浄土信仰に代わり、口称念仏への専心こそが極楽浄土への往生の道と説く法然坊源空（法然）の言説が評判を呼ぶ。当時の最上級貴族の一人・九条兼実も、期待をかけた長男の内大臣・良通の早世により無常を感じ、法然に深く帰依するようになる。兼実は、良通の死の翌年にあたる文治５年（1189）以降、たびたび法然を自邸に呼んで戒を受け、さらに権謀術数渦巻く政界での失脚から数年を経た建仁２年（1202）には法然を戒師として出家し、円証と名乗っている。口称念仏を唱道する法然に帰依する円証こと兼実は、浄土庭園をともなう仏寺の造営をおこなうことはなかった。その一方、別業・月輪殿に時を過ごすことが多く、そこに法然を招くこともしばしばであったといわれる。

法然上絵の月輪殿　知恩院に伝わる国宝『法然上人行状絵図』（以下、「法然上絵」）第八巻第五段は、元久２年（1205）４月５日、月輪殿に招かれた法然が帰途に就くとき、円証こと兼実の眼に、法然の体が浮遊し頭光を発するのがみえた、との逸話とその描画（図Ⅰ-90）である。本文をあげておこう。

> 同年四月五日、上人月輪殿にまいり給て、数刻御法談ありけり。退出のとき禅閤庭上にくづれをりさせ給て、上人を礼拝し、御ひたいを地につけて、やゝひさしくありておきさせ給へり。御涙にむせびて、仰られていはく、「上人地をはなれて、虚空に蓮花をふみ、うしろに頭光現じて、出給つるをば見ずや」と。右京権大夫入道〈法名戒心〉、中納言阿闍梨尋玄〈号本蓮房〉、二人御前に候ける。みな見たてまつらざるよしを申。池の橋をわたり給ひけるほどに、頭光現じけるによりて、かの橋をば頭光の橋とぞ申ける。もとより御帰依ふかゝりけるに、この後はいよゝゝ仏のごとくにぞ、うやまひたてまつられける。

月輪殿は、平安時代の藤原氏の氏寺として知られる法性寺の境内のなかでも東山山麓寄りにあったと考えられ、現在の東福寺即宗院の寺地に比定されている。兼実

図Ⅰ-90　『法然上人行状絵図』第八巻第五段（『続日本の絵巻１　法然上人絵伝・上』中央公論社1990から作成した線描図）

にとって、法然を迎えて法談を聞く月輪殿こそがこの世の浄土であったとも考えうる。さればこそ、法然の姿が彼の眼には仏のごとくにみえたのであろう。法然上絵は、後伏見天皇の勅命で徳治２年（1307）から10年ほどの歳月をかけて制作されたものと考えられている。第八巻第五段の踏蓮頭光の逸話のころからは100年ほどの時を経ての作品ということになる。したがって、同段に詳密に庭園が描かれた月輪殿は、法然が兼実のもとを訪れた逸話の当時の実景というよりも、絵巻制作時に絵師が抱いた兼実の浄土としてのイメージという側面が強いと考えるのがむしろ妥当であろう。そして、邸宅のなかでも浄土の観点で重要な意味をもつものとみなされていたのが、ほぼ全景が描き切られた庭園であったのではなかろうか。描かれた庭園の構成要素を以下に分析し、兼実の浄土のイメージとして想定された庭園において本質的に重要とみなされていたものが何であったのかを考えてみたい。

この世の浄土を演出するもの　まず、目を引く庭園の構成要素としては、滝と池があげられる。月輪殿が東山山麓に接して立地することから、画面右端（敷地東端）と画面左寄り上部（同西部北側）の２ヵ所に滝が描かれる。落差のある水量豊かな滝は、造成によって地形の起伏がおおむね平坦化された人工都市・平安京の中では実現不可能なものであり、郊外の山際に立地するこの邸宅の大きな特色であったに違いない。滝については、あるいは遺存していた実景をもとに描写した可能性もある。池は東端の滝から続く流れ状の「東池」、西部北側の滝を受け、中島をもつ「西池」の２つからなり、いずれも出入りの多い複雑な汀線をもつ。池の護岸は全般にゆるい勾配で立ち上がる州浜で、要所には石組がみられる。また、東池には反橋が１本、西池には反橋（「頭光の橋」）１本と平橋２本が架かる。建物の東と北は自然地形の山が迫るが、一方で池の南側などには築山が配される。植栽はカエデとマツが中心で、花をつけたツツジもみられる。また、東端の滝付近にスギとヒノキ、釣殿わきにはタケ、西の門近くの山にはマキやカシワと思われる木がみえるが、その他の樹木の樹種特定は難しい。また、浄土への誘いの表現ともいわれる水鳥[2]を含め、動物は一切描かれていない。

兼実のこの世の浄土を表象し、法然の踏蓮頭光の舞台とされた月輪殿の庭園の最重要構成要素と絵師が考えたものは何か。以上にみた描写から類推すれば、変幻自在に滝や池の形をとる水と結論づけられよう。むろん兼実の実際の月輪殿においても東山の山中から流れ来る豊かで清冽な水に潤される庭園は出色の存在であり、少なくともその世評は法然上絵制作の頃まで伝わって、それがこうしたイメージの下敷となったこともまた確かであろう。

（小野健吉）

付記

本稿は筆者が共同研究員として参加した国際日本文化研究センターの共同研究「日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教」（2013-14年度）でおこなった発表をもとに取りまとめものである。

註

１）小野健吉「臨池伽藍の系譜と浄土庭園」『平安時代庭園の研究』奈文研、2011。

２）五味文彦『『春日験記絵』と中世』淡交社、1998。